

【コメント 2】

著者	木村 法光
雑誌名	日本の伝統工芸再考 外からみた工芸の将来とその可能性
巻	27
ページ	316
発行年	2007-09-03
その他のタイトル	【Commentary 2】
URL	http://doi.org/10.15055/00002685

【コメント 2】

木村 法光 Kimura Norimitsu

元京都市立芸術大学美術学部教授

クリフトン・モンティス氏の発表は、ご自分の育った環境と東洋への憧れ、国際交流基金を貰って、日本を始め東南アジアの若い優秀な工芸作家達と交わり、彼らの用いている自然に優しい素材、特に漆・膠の素晴らしさを知り、その技法をマスターし、自の創作活動にこれを生かし、アメリカでも好評を得たというものであった。またこれらの素材や技法を学びたいという若者に伝授しているというものであったと思料する。

そして、紹介された幾点かの氏の作品は、確かに漆や膠を用いた素晴らしく出来映えの良いものとお見受けした。また、その素材や技法を紹介したわが国の若い作家達も漆工家として作家活動をし、或いは教壇に立っている人達ではあるが、「日本の伝統工芸」として今日私たちが享受している漆工芸品や柿渋工芸品（そんな呼称があるかどうかは知りませんが、恐らく「一閑張」工芸のことと思料する。）の伝統は、いわゆる作家や芸術家によってのみ伝えられてきたものではなく、名もない職人さんや熟練工と呼ばれる人、或いは名人・名工と呼ばれる人達によるところが大変大きかった。

少なくとも、小生の経験してきた工芸品の調査研究を助けてくださった多くの人達はそうであつたし、彼らはその専門とする仕事に対して常に問いつづけ研究熱心でもあった。

数年前、『江戸時代の漆藝名品展』を東京国立博物館で開催されたのを見た。かつては「江戸時代の工芸品は技巧にのみ走り、独創性に欠ける。よって芸術的価値はない、或いは低い。」と評価されたものであった。しかしこれらの作品群は実に素晴らしく、見るものの心を捉えて放さない。もし誰かの作品が如何に独創的なものであったとしても、技術的に未熟で、お粗末な作品は私にとって評価は低い。

もし氏が、「日本の伝統工芸を今後も学んでみようか、もう少し日本の伝統工芸を勉強してみたい」とお考えのようだったら次回は是非、そのような人達とも交流を計っていただき、また美術館や博物館、或いは店頭に列ぶ作品や職人さんにも接して頂きたい旨申し添えたい。